<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>平井 邦男</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大手前女子大学論集</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>31-45</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1975年11月</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1160/00001101/">http://id.nii.ac.jp/1160/00001101/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
現代における哲学の機能を考える時、我々は哲学と科学の関係を抜きに考察し進めることができない。二百世紀は科学の世紀といわれる。しかし、哲学の主要課題の一つが「哲学とは何か？」という問いそのものだからである。即ち、哲学の

探求すべき問い及び方法論の確立それ自体がすでに哲学の一節に含まれているのである。それ故、哲学者は自己の探求を始めるにあたって、「哲

学生、科学、形而上学

平井 邦男

– 31 –
哲学、科学、形而上学

哲学とは何であるか？という問いに対する答えではないが、そうした問いに対する答えが哲学の実際の意義を明らかにすることである。

哲学は、自己認識の方法である限り、我々は以上の事柄を問題にしてみようと思う。そこで、新たな尺度を通じて我々は我々なりに哲学とは何か？という問いに対する答えを求める。

「哲学的」という規範は、言語の理的、物的、本質的な構造によって成立する。「哲学的」の意味は、「哲学的」の持つ哲学的な目的、明確化された哲学の成果がある。その目的は、思想の理論的、実在的、本質的な構造によって成立する。それらの哲学的帰属表現のままである思想を明瞭にし、それに正確な輪郭をあたえる目標を求める。

哲学は、言語の目的を明らかにするために、それらに関する言語を示唆するにいたる。

哲学の正しい方向とは、次のことときそのである。語られるもの以外には、何にも語られる。

哲学と科学、形而上学二者の相違は、論理実証主義の主義がこれらの断片の延長線上に発生することとは見えないことである。
さて、「哲学の課題が言語分析である」というヴィートゲンシュタインが始める論理実験主義を経て、現代分析哲学に至っている哲学教科書には強い印象が残っている。主に形而上学の観点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとされる。しかし、これは形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとは限らない。なぜなら、形而上学的視点からは、哲学の課題は言語分析であるとされるが、これは形而上学の観点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとは限らないからである。

さて、ヴィートゲンシュタインが「哲学の課題が言語分析である」というのは、形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとされる。しかし、これは形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとは限らない。なぜなら、形而上学的視点からは、哲学の課題は言語分析であるとは限らないからである。

さて、「哲学の課題が言語分析である」というのは、形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとされる。しかし、これは形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとは限らない。なぜなら、形而上学的視点からは、哲学の課題は言語分析であるとは限らないからである。

さて、「哲学の課題が言語分析である」というのは、形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとされる。しかし、これは形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとは限らない。なぜなら、形而上学的視点からは、哲学の課題は言語分析であるとは限らないからである。

さて、「哲学の課題が言語分析である」というのは、形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとされる。しかし、これは形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとは限らない。なぜなら、形而上学的視点からは、哲学の課題は言語分析であるとは限らないからである。

さて、「哲学の課題が言語分析である」というのは、形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとされる。しかし、これは形而上学的視点から考察した場合、哲学の課題は言語分析であるとは限らない。なぜなら、形而上学的視点からは、哲学の課題は言語分析であるとは限らないからである。
哲学、科学、形而上学

こういった個人の情動を表現するにすぎないものとなる。ここから現代の代表的な倫理理論である情動説（emotive theory）が出てくるのは当然であろう。

科学は(1)と(2)の命題のみを扱い、(3)の文章は科学から除きなければならない。

さて、論理実証主義者以上のように有意味な文、情動文（形而上学、倫理学等の文）

(1) 我々の経験とは無関係に真・偽を決定できる。論理的命題（恒真命題）命題。
(2) 経験によって真・偽が検証できる文。経験命題（科学によって扱われる命題）。
(3) 真・偽の検証手段に持たない有意味な文。経験命題（形而上学、倫理学等の文）。

まず第一に意味の検証理論を厳格に適用すると、検証理論をはずれた文章そのものが無意味となる。即ち、その文章はその真・偽を決定しない文や意味の検証可能性の理論によって形而上学を科学から除けなければならなくなる。

という意味において意味をもつのである。この言語の階層理論によって、意味の検証理論自体はメタ言語で解釈されて、有意味とされるのである。

さて、次に、意味の検証理論にはさらに大きな困難が存在する。それはこうである。科学の扱う命題は普通、個別命題ではなくて、全体的命題を扱うものである。
カル・ポパーは彼自身述懐しているように、最初から科学と仏教科学（形而上学）の区画の間で興味を示していた。彼が最初にとりくんな哲学的問題は以下の区画問題（The Problem of Generation）である。そして彼は、論理実証主義者とは別に、独自の方法でその区画問題に対する答えを見出した。それは「反証可能性（Criterions of Determinacy）」、「反証可能性（Criterions of Falsifiability）」で呼ばれるものである。彼はいっている、「論理の科学的基準は、その反証可能性の基準である。」

まず第一に、科学は「純粋なる観察」によってはじまるので決してない。先入観を持たない純粋なる観察をするのがこの方法である。我々はそのような観察をもってないし、また観察結果をいかに解析するか、それが科学的であるかは決して出てこないであろう。科学的発見の基準は観察によって決まるのである。我々が問題を解決する方法は、我々の知っているような世界を理解しようとすると我々の企画において発生するのである。

最後、第二に、科学の命題である全称命題は様々な個別命題から帰納的推論によって導き出されるのである。仮説はどのように非合理的な方法で思いつかれてかまならない。我々は問題状況から仮説を形成し、それを飛躍する。その際、仮説が如何にして形成されるのかは論理的な事柄ではない。
である。
さて、第三に実験は観察の役割は、実証主義者のいうように、仮説の正しさを検証したり、証明したりという肯定的なものではない。逆にそれを否定的な性格を持つ。即ち、「理論のあらゆる否定のテストは、それ自身を反証する。もし仮説がテストされて反証されなければ、それは仮説である。」という点は、仮説の否定性が現実の科学的形態で記述されなければならない。これがポパーいうところの科学の反証可能性の基準なのである。

科学が経験的な学であり、そして経験が理論の否定性において決定的な意味をもつものとすれば、科学は形式上、経験によって反証可能な形態で記述されなければならず、我々は科学理論としての論理実証主義の主張より、ポパーの主張の方が当然であると考えられる。ポパーの反証可能性の基準にも問題がないわけではない。
まず第一に、ボパーのいう「演繹的テスク」としては仮説は実際問題として決定的に反証されないのがである。ボパーは演繹的テスクとして次のようなる事柄をあげている。

(1) 仮説の内部の整合性の確認
(2) 仮説の経験性の確認
(3) 仮説の進歩性の確認
(4) 実験による批判
こうしたテストにより仮説の延命をはかることができる。ボパーはこれを「コンベンションシナリオの方法」(CONVENTIONAL STRATEGIES)として提案する。

(1) 理論に補助仮説をもって、実験結果に対し矛盾しないように操作する。
(2) 理論の中の方策を理論上は正当なものと認めざるを得ない。という。成り仮説に補助仮説をもって仮説のことをするから、我々の体験が予想されている場合にも、実験の難易を否定する。
(4) 反証を受け入れる理論家を非難、中傷し、その権威を否定する。以上四つである。

このコンベンションシナリオの方法に対し、どのように対処するべきか？ボパーは次のように述べている。「コンベンションシナリオは避け自明のである。こうしたテストにおいて仮説の変動をはかることができる。ボパーはこれを「コンベンションシナリオの方法」(CONVENTIONAL STRATEGIES)と呼んでいる。そしてコンベンションシナリオの方法を論ずる。
哲学、科学、形而上学

である。という立場も同様の見地からなされたものである。実証主義者にとっては科学だけが有意義な命題の集合なのか、哲学家はこの科学の理論を形式化し、その形式の論理構造を明らかにすることが任務になる。このことをロジカル・シンタックスを作る活動を行う」というのである。

以上のようない哲学観にボパーは当然のことながら反対している。彼にいわれば、科学は科学の問題を解き、哲学者は哲学的問題を解くべきである。もしボイトゲンシュタインの学説が真であるなら、その時には、誰も私の言う意味で哲学することのできないものである。ボパーにとっては哲学の、即ち哲学の背景にある世界を理解するという問題である。哲学は「宇宙論」であり、同時に「すべての科学が宇宙論」である科学論を持つことはできない。哲学は「宇宙論」であり、同時に「すべての科学が宇宙論」である。(ボパー)……のほうが、それらが宇宙論に対して貢献してきたかはなおである。哲学対しての哲学としての、世界を理解するという問題に対して、いかなる世界を理解するか、両者の違いはどう存在するのか？また両者の関係はどのようになっているのか？

科学の基準は先述したように「反証可能性」ということであった。そして哲学と科学とは異なる学のだから、そこから哲学は「反証不可能な理論」ということになる。実際、ボパーの哲学は「科学で反証不可能な学」と規定している。それでは、反証不可能な学である哲学と、反証可能性を持つなければならない科学とは、同じ「宇宙論」同一「世界を理解する」という問題に対して、どのように関係にあるのだろうか？ボパーはこのような重要な関係にあるのだろうか？ボパーはこのことで、近代科学に対する古代ギリシアの自然哲学の役割などを考慮に入れ、哲学を科学の先駆的形態、見なす立場をとっているように思わ
哲学者は科学者に先だって、世界についての新しい問題を発見し、様々な形の形而上学的観念を発展させる。それらの諸理論はいまや反証可能である。哲学者は科学者のパイオニアであり、科学とはいえないので、科学の進歩のためにはかかわる先駆的な仕事を存在しなければならない。哲学者は科学の反証可能なる学問のパイオニアである。哲学者は科学の問題を発見し、その問題を解明するための新たな観念を発展させる。哲学者は科学のパイオニアである。哲学者は科学の問題を発見し、その問題を解明するための新たな観念を発展させる。哲学者は科学の問題を発見し、その問題を解明するための新たな観念を発展させる。
論理実証主義者にとっては哲学は言語分析である。また、ポパーにとっては哲学は科学の先駆けとしての一言論である。両者の主張は相異っても、

経験科学が所謂仮価値性を持つことさえ、様々な議論がそこにある。いまで歩ゆずって経験科学の仮価値性を認めめたとしよう。しかし、

その時でさえ、哲学は科学とは異なる学であるが、仮価値の問題を含まない、といつ前提である。マックス・ウェーバの用語を用いれば、

哲学は仮価値（Wertfreiheit）という事であることである。彼らの哲学観が彼らの科学観と共通に、学から仮価値の問題を排除しようという意図から出ているのは見やすいことである。さ

て、問題はこの点である。
フィンカ、エティカ、の三要素によって構成されるのである。

我々は常生活においてはあるがままの生を直接的、即目的な形で生きていく。我々が生涯の間中この「幸福な無反省的即目的生」の状態にとどまっていることができれば幸いである。しかし、言葉をもち、記憶をもつ、思考する人間はこの状態にとどまっていることができない。

それは始めから終りまで即目的に存在する。即ち、人間は「不幸な意識を持つ存在なのである。意識をもたない生物はたった反射的に行動するだけである。しかし、人間は言葉を用いることによって意思を巨大に発達させた。それは進歩であったが、同時に人間は即目的生を意識して行うことができたのである。

私の一見何をすればよいのか？」という規範的問いは規範的、倫理的問いを発する。即ち、人は自己の行動原理、行為規範を模索するのである。

哲学は、「人間のための存在」として規範を持つのである。哲学における方法論を示すものとして存在するのである。哲学とは、「治療」である。ただ我々はその治療は「ヴィトケンシュタイン」の、「エニーハラ」と「精神科の医者」としてメスをふるわなければならない。哲学はこのように方法論を示すことによって存在するのである。そうであってこそ、哲学は科学とは異なる。

哲学は言うならば、「精神科の医者」が言うように、「哲学は言語批判による問題そのものの解消をはね付けない。哲学は科学とは異なる。

哲学は言語批判による問題そのものの解消をはね付けない。哲学は科学とは異なる。哲学は言語批判による問題そのものの解消をはね付けない。哲学は科学とは異なる。
哲学は、一般的な経験の知識、論理的知識を有するものである。このことから次のようなことが言える。即ち、哲学は、一つではありえない。一つの哲学が存在するのではなく、様々な哲学が存在するのである。哲学は、一つの言語範囲を越えて、様々な経験と考察を含むものであり、科学の一部であり、科学と形而上学の境界を越えるものである。科学の一部であり、科学と形而上学の境界を越えるものである。科学の一部であり、科学と形而上学の境界を越えるものである。科学の一部であり、科学と形而上学の境界を越えるものである。科学の一部であり、科学と形而上学の境界を越えるものである。科学の一部であり、科学と形而上学の境界を越えるものである。科学の一部であり、科学と形而上学の境界を越えるものである。科学の一部であり、科学と形而上学の境界を越えるものである。